

〈支那事変歌集〉における中国人表象——越境する〈少年〉——

野 間 颯

序

本稿では〈支那事変歌集〉における中国人〈少年〉表象の検討を通して、戦地詠と銃後の短歌との関係性の再定義と再評価をおこなう。この〈支那事変歌集〉とは日中戦争が本格化した一九三七年以降に出版された、「支那事変歌集」と名の付く複数の短歌集のことである。現在以下の六つが確認できる。

- (一) 柳原白蓮選『塹壕の砂文字』^①（協和書院、一九三八年九月）
- (二) 斎藤茂吉・佐佐木信綱選『支那事変歌集』（三省堂、一九三八年二月）【読売】
- (三) 斎藤勇編『続支那事変歌集』（淡水学園刊、一九三九年三月）

【淡水】

- (四) 大日本歌人協会編『支那事変歌集 戦地篇』（改造社、一九三八年二月）【戦地】

- (五) 斎藤茂吉・土屋文明編『支那事変歌集』（岩波書店、一九四〇年一〇月）【アララギ】

〈支那事変歌集〉における中国人表象

- (六) 大日本歌人協会編『支那事変歌集 銃後篇』（大日本歌人協会、一九四一年一〇月）【銃後】

ここではこの内、(一) (三) (四) (五) (六) を検討し、それぞれの収録短歌の内、本稿で検討するものは一つであり、『塹壕の砂文字』(同上) に関しては、検討することはない。この取り扱いの偏りに関しては、それぞれの書誌の性格に依るものである。^②

これら短歌集が出版される経緯は【読売】の清水彌太郎「跋」の内容に集約されるだろう。「今こゝに最初の発表（昭和十三年四月）以来半歳に互つて応募された短歌、七万六千四百六十五首中、予選通過、文芸欄に掲載されたものの内特に事変を記録する意味に於て、現地と銃後に於ける事変歌約八百首を収録」「国民の前に問ふこととした」(二頁)。「読売新聞」紙上の企画「懸賞讀賣歌壇俳優」を再構成した【読売】は、膨大な歌数の上に成り立っている。それを強調するように、当時の読売新聞社学芸部長は、「事変歌」というものの盛り上がりを具体的な数字として示している。

その次に出版された【戦地】は、より大規模な企画となった。その収録歌数もさることながら、^④『朝日年鑑 昭和14年』（朝日出版社、一九三八年一〇月）の一九三八年「四月」の欄に「大日本歌人協会は『支那事変歌集』の出版を計画、文部省は出版費に千五百円を補助し十月までには第一集を出す予定」（三九八頁）とあるように、文部省から支援を受けた国家事業と化している。一九三九年一月一九日の「読売新聞」夕刊に小泉荃三が寄せた「事変と歌壇」には「昨年の武漢攻略に際し多数ペン部隊が従軍したなかに、一人の歌人をも従軍させることのできなかつた大日本歌人協會ではわづかに『支那事変歌集』^マ現地篇を刊行することによつて、協会の存在をあらわかにしてくれた」と評価している文が見つかる。大日本歌人協會としても意欲的に援助を受けたようで、実際『文藝』一二月号に打たれた広告には「文部省後援」の文字が大きく踊っている（一九三八年二月）。

一九四〇年出版の【アララギ】は、日中戦争後期に差し掛かっての出版だが、この年は皇紀二六〇〇年と大きな節目の年であり、紀年の性格が強い。^⑤【アララギ】はその名の通り雑誌『アララギ』からのみ短歌を選出するため、他の〈支那事変歌集〉よりも収集対象が狭まるが、それでも一〇二六首を収録しており、当時の最大派閥としての勢いを感じさせる。

このように当時の歌壇が注力して複数生み出していた〈支那事変歌集〉だが、その中であつても、ほとんど注目されてこなかったの

が【銃後】である。これは大日本歌人協会での内紛・解散のありを受け、【戦地】の姉妹篇でありながら掲載方針と体裁が異なること、発刊時期が遅れたことが遠因として考えられる。しかし一方で【読売】や【アララギ】の中に含まれる銃後の短歌も一様にその存在は軽視されており、銃後の短歌そのものが検討俎上にない傾向にある。それは研究状況を確認しても分かる。

小松靖彦^⑥「日中戦争下における「醜の御楯」の意識——聖戦短歌を通じて〈戦争と萬葉集〉」（『日本文学』六四巻五号、二〇一五年五月）では、〈聖戦歌集〉と称して一〇の歌集を比較検討している。^⑦

その中では「聖戦」を直接批判する作品は収録されておらず、「聖戦」の肯定を前提とする類同的な歌が多い（四四頁）と、戦地詠と銃後の短歌の区別をすることなく戦争賛美的なものとして画一的に取り扱っている。小松靖彦のアプローチは横断的なものであり、『萬葉集』を起点とする影響関係が精緻に分析されているが、当時の歌壇における一種の企画／運動とも言うべき〈支那事変歌集〉の出版状況を捕捉しているとは言い難い。【読売】【アララギ】がその一冊の中で「戦地」と「銃後」を明確に分けていたこと、【戦地】の中に銃後の歌が混在しないようにいかに配慮したのが記されていることを勘案すれば、この二つは注意して取り扱うべきものだと思われる。

一方でこの戦地と銃後を断絶したものとして取り扱っているのが、坪井秀人である。「戦争短歌における前線と銃後——『支那事変歌

集』その他」(山口俊雄編『日本近代文学と戦争——「十五年戦争」期の文学を通じて』三弥井書店、二〇二二年三月)は、〈支那事変歌集〉を他の文学テキストと比較検討し、その特徴を位置付けているが、銃後の短歌については「紙幅の都合上、〈銃後〉の歌に詳しく触れることが出来ない」(一一四頁)と詳細な検討を避けている。その後「銃後の歌についてより注目しておきたいのは、この戦争において短歌が描こうとした戦場というのが、結局はメディアの中の戦場だったということ」、「戦争はニュース映画、あるいはラジオ、あるいは新聞の記事の中にまず存在したのであり、それ以上のものたりえなかった」(同上、一一五頁)と指摘していることを踏まえると、銃後の短歌のリアリティ、ひいてはその価値に懐疑的であるようにも見える。実際に坪井秀人は「戦地と内地とは連続しておらず、空間的に不連続であるという、そういう意識を作り出す前提があらかじめ用意されていた」、「つまり前線(戦線・戦地・戦場)と銃後という二元的なパラダイムがつくられていた」(同上、八五頁)と、両者の性質を別物として捉えている。

しかし戦地詠と銃後の短歌との立ち位置を、このように二元化して捉えても良いのだろうか。本稿では、先行研究で詳細に言及されることの少なかった、銃後の短歌の新たな位置づけを試みるために、〈支那事変歌集〉における中国人〈少年〉表象を軸に検討する。ここでの〈少年〉とは児童を含む、成人としての働きを期待されていない広義の子どものことである。

日本人兵士にとって中国人〈少年〉は、深く興味を抱く対象であった。それは、現役兵士の歌人であった渡邊直己が「軍人を一番喜ぶのは子供と犬だとは誰かが言つてゐたが、例に洩れず支那でも一番になつて来るものは子供だつた」(『北支風景』『呉港新報』第七一号、一九三八年六月一日、引用は『渡邊直己全集』創樹社、一九九四年一〇月、四五九頁)と記したことからも分かる。この所感は多くの歌人に共通していたようで、〈少年〉たちは多く短歌に表象されている。このように多く描かれていることに限っても、〈少年〉は戦地詠と銃後の短歌を比較する好対象だが、描かれ方にも取り上げる理由がある。一部結論を先取りすることになるが、短歌上での中国人〈少年〉は時として、所属する国が消去された、抽象度の高い〈少年〉として描かれていることが認められる。「前線(戦線・戦地・戦場)と銃後という二元的なパラダイム」(同上、八五頁)の配置とは異なる関係性を提出する本稿では、この国境を飛び越える〈少年〉を対象とする必要がある。本稿ではこうした「越境する少年」としての中国人〈少年〉表象を手掛かりに、戦地と銃後の関係性を再考する。

一、日本人兵士と交流する現地の子ども達

まず本節では現地の子ども達である中国人〈少年〉を検討する。最初の問題となるのが日中交渉の状況だが、日本人兵士と現地の中国人との交流はあまり活発だったとは言えないだろう。日本人兵士

の中で言語コミュニケーションを取れる人間は少数派であったためである。その表れが「支那語わかぬわれ支那に来て焼跡にあそぶ雀のしたしかりにき」(上海／安宅苔花【戦地】八頁)のような歌である。この歌は中国語が分からない日本人兵士が孤独を感じ、雀にすら親しさを覚える様を描いており、言語の壁の存在を伝える。このような状況下に置かれた日本人兵士にとって、現地で交流することのできる人間は貴重な存在であったはずだ。その主な相手として〈少年〉である現地の子ども達がいる。

何事をか吾に語れり緬羊に草食ましゐる支那少年は

中支／大久保福太郎【アララギ】(六一頁)

この歌は羊飼いである「支那少年」が、「緬羊に草」を与えながら「吾に」何かを話しかけていることを詠ったものである。会話の内容が「何事をか」と分からない状態で放置されており、重要視されていない。しかしそれでも「支那少年」が短歌に描かれたということは、交流そのものに価値が見出されていると考えられる。そこには見知らぬ人であろう「吾」に言葉が通じなくても語りかける、無邪気で純粋な様子も印象付けられている。このような現地の中国人との交流は、子どもでないと成り立たない側面があった。同じ大久保福太郎の歌に「釣糸を垂れ居たる支那男が吾に辞儀して忽ちかくれぬ」(アララギ【六二頁】)があるが、「支那男」の態度は明らか

に日本人兵士、もしくは日本人全体に対する恐怖心が表れている。戦争に戦闘員として参加する成人の場合、このような態度をとることは容易に考えられる^⑨。一方で基本的には非戦闘員である子ども達は、双方の交流が表象され得る。雀にすら親しさを覚えるほど孤独な、当時の日本人兵士の立場を勘案すると、たとえ会話が成り立たなくとも、戦う相手ではない現地の子ども達との交流がいかに重要な位置を占めているのかがうかがえる。この交流対象に選ばれた子ども達の詳細は、次の二首のように描かれる。

下士哨の屋根に飾れる鯉のぼり支那の子供等きたりて見をり

北支／久保田健次【戦地】(二〇一頁)

「車中作」

山すその竹むらかげの茶畑に少女手を舉げて旗に應へをり

満洲派遣軍／八木沼義清【読売】(二〇五頁)

この二首では、現地の子どもが日本の文化的象徴と並置されている。一首目は日本人兵士達がいる下士哨に飾られている「鯉のぼり」と、それを眺める現地の子ども達を描いており、戦地特有の喧騒はうかがえない。「支那の子供等」が日本人兵士の生活圏である「下士哨」に来ることは、両者の良好な関係性を強調する。二首目は麓にある茶畑で作業をしている現地の少女がわざわざ手を止めて旗に反応する、双方の好意的な交流が描かれているように思われる。

この「少女手を舉げて」「應へ」たのはおそらく日章旗であり、日本へ友好的な少女像が浮き彫りになってくる。

両首とも一見平和的な交流が描かれている。しかし「鯉のぼり」も日章旗も日本の代理表象として機能する。当時の詠み手がどれほど意識的であったかは定かではないが、純粋な存在として描かれた子ども達がそれらを受容することは、今日的価値観からすれば日本の侵略行為の正当化だと批判的に指摘することができる。その効果がより前景化しているのが次の歌である。

「太原」

自國兵の暴行をまのあたり見し少女民國兵隊不法とののしる

中支／神山重義【戦地】（九〇頁）

この歌では「少女」の台詞部分が中国語であるため、読者にとって実際にあった場面を切り取ったような表現となっている。注目するべきは詞書の「太原」である。太原地域は当時日本が占領した地域の一つであった。そこで社会的弱者である「少女」が「民國兵隊不法」と告発する状況を描くことにより、日本人兵士が太原地域を救出するために訪れたかのような印象を読者に与えている。

この現地の少女が中国人兵士を糾弾する姿は、『読売新聞』の「童心支那へますらをの涙」（一九三八年一〇月一日、朝刊、七面）でも確認できる。戦争被害者としての子どもたちの話の内の一つ「その三

死体を抱き泣く少女 怖い／＼支那の兵隊を呪ふ」は、少女が「支那の兵隊は恐ろしい」と日本人兵士に語っている。

ただし、日本人兵士と現地の子どもの達との交流が描かれることは、日本の正当化にのみ働いていたとは言えない。次のようにその交流が、読者によつては日中の非対称な関係性を浮き彫りにしていると読み取れるものもあるからだ。

街角に駄馬とどむれば茹玉子など賣る童等の群れ纏ふなり

上海／眼白由尾【戦地】（二一九頁）

例えばこの短歌には、上海での交流の在り方の一例が示されている。当時の上海における日本人への印象は決して画一的ではないが、上海居住の雅樂川雅樂による「ゴシック赤き支那新聞に敵といふ文字とどこどこに見えはじめたり（詞書「上海ニュース」【戦地】四五頁）が表出するように、日本への敵対意識は確実に存在した。そのような状況下で「茹玉子など賣る」中国人「童等の群れ」が比較的金銭に余裕のある日本人兵士に「纏い、物を売ろうとしている姿は中国でありながら日本人が優位に立つ、租界としての上海の性格を描き出している。このような状況を取材したことにより、この短歌は日中関係の非対称性を暴き出す効果を持っている。ただし詠み手の思想や立場は明示されておらず、批判的とまでは言えない。実際、同時代の言説に目を向ければ、肯定的なものも目に入る。

『アサヒグラフ 支那事変画報 第三十一報』の「先生卵進上」（東京／大阪朝日新聞社、一九三九年七月、三〇頁）にはこうある。

難民の子等が兵隊を見つけては「先生卵進上」と集つて来る。進上と云ふから呉れるのかと思ふと買つて呉れと云ふのである。やる意味にも、買ふ意味にも、くれろと云ふ意味にも使つてゐる。兵隊さんは子供が来ると必ず買つてやる。この商売、大人は小孩軍に完全に敗けた。

筆者である麻生豊が挿絵も描いているが、これも相まって、にこやかな小話として語られている印象を受ける。このように、肯定的なレベルも並存している。

次の歌も同様である。

飯領つ時にはあまた群れ寄れどなつく子のありなつかぬ子のあり
り
中支／上原吉之助【戦地】（四七頁）

食料を分け与えている時は多くの子ども達が集まってくるが、「なつく子」と「なつかぬ子」に別れるその態度の差を詠んでいる。先の短歌にあった「鯉のぼり」や日章旗のような日本の代理表象を介して、日本人兵士と現地の子どもの達は短歌上で結び付けられていた。しかしそれが示す日本という国家の枠組みよりも、食糧配給の方が子ども達の関心を惹いているのである。詠み手がどこまで意図していたのかは判然としないが、目の前の子どもの関心を描き出す

ことで、先の短歌が描いた日本の代理表象と親和する子どもの存在を批判するものにもなり得る。

同じく、現地の子どものへの食糧の配布をめぐる問題を表した短歌が次の三つである。

「北支戦線」

錢不要、飯進上と言ふ小孩らの感情がちかに来る

北支／川妻又治【戦地】（八二頁）

顔を見れば飯進上と呼ぶ、この小孩らの心は笑へぬ

同（八二頁）

飯、飯、タバコ進上と幾度かせがまれて、春がこの町にも来た

同（八二頁）

川妻又治という歌人は「飯進上」とせがんでくる「小孩ら」というモチーフを、変形しながら三つの短歌に詠っている。三首目では「タバコ」と「飯」を「進上」するように求める子ども達が描かれている。「飯」が「タバコ」よりも多く記されており、子ども達の深刻な状況を伝えるような工夫が凝らされている。その上で「小孩らの感情がちかに来る」や「心は笑へぬ」と悲愴を感じ取っている。ただしその状況を生んだ原因、日本による侵略行為が元であることにまでは踏み込めていない。一人の歌人が三つの短歌に中国人（少年）のモチーフを織り込んでもなお、そこにある日本の加害性まで

は描き切れていないのである。

*

以上本節では兵士と交流した現地の子どもの達の表象を検討したが、詠み手の自覚／無自覚に関わらず、その表現は日本の侵略行為を正当化するために働いた側面がある。成人した中国人は戦闘員になる可能性をはらんだ明確な敵であり、そのような相手との交流は生まれづらい。結果的に言語の壁を越えられる現地の子ども達に、そのような表現が集中するのである。日本人と親しく交流し、時には自国の兵士を批判する姿を描くことは、日本の侵略行為が中国人にも理解されているかのような印象を持たせる。

一方で日本人兵士と現地の子どもの達の交流を短歌で表現することで、彼等の非対称な関係性が明らかにされている例も見られた。しかしその場合も、日本の侵略行為を積極的に批判するものとは言いがたく、このことに当時の時代性が改めて確認されるのである。

二、同情の対象である中国人少年兵と犠牲者

前節では〈少年〉表象の中でも非戦闘員である、現地の子ども達を検討した。彼らはその立場のために、日本人兵士にとって積極的な交流対象であった。それでは戦闘員である中国人少年兵はどうか。当時中国人少年兵が多数いたことや、それが生み出される原因となつた構造的な問題は既に指摘されている。^⑩ 本節では中国人少年兵が短歌に配置されたとき、どのような意味を持つのかを検討する。

*

少年兵と限定しない中国人兵士は、その多くが卑怯さや臆病さに焦点が当たる。^⑪ もしくは命を奪う対象でしかなく、詳細に描かれることは少ない。^⑫ 一方で中国人少年兵は、比較的工夫された短歌が多く見受けられる。

「九月二十二日、大冊河激戦」より一首

死際の言葉わかねどうら若き支那兵は母よと呼びにけむかも

北支／門井眞【戦地】（七八頁）

この短歌は戦地で最期を迎えた中国人少年兵に焦点を当てている。短歌中で「支那兵」は「うら若き」と明記され、〈少年〉であることが確認される。そして戦場という逼迫した状況でありながら、詠み手は「死際の言葉」を聞き取ろうとする。しかしその甲斐虚しく、言語の壁によって実際に何を言っていたのかは分からない。そこで詠み手の想像で「うら若き支那兵」の声を「母よと呼びにけむかも」と補完するのである。戦地にいる兵士達は敵兵を直接認識している。その上でこの詠み手は、同情心をかき立てるような声を想像するのである。この短歌から中国人少年兵への同情的なまなざしが認められる。次の歌も同様の効果である。

「潞安入城（共産軍抗日戦基地二月二十二日陥落）」より一首

にくみてもなほ餘りある共產軍捕虜は大方わらべなりけり

北支／齋藤秋村【戦地】（一二三頁）

「にくみてもなほ餘りある」から始まるこの短歌は、最初に中国人兵士への憎悪を強く印象付ける。しかしその後「捕虜」が「大方わらべ」であることが明かされ、「なりけり」とあるように、やり場のない気持ちを抱く。この短歌では言葉の配置を時系列通りにすることによって、詠み手の気持ちを読者が追体験できるようになっている。

さらに「共產軍」であることも、そのもどかしさを導き出す要因となる。『読売新聞』（一九三八年八月一五日、朝刊、七面）には「笑止や少年紅槍隊抗日教育に操られて山西戦線へ」と題して、中国人少年兵が共產軍に騙されているとする言説が掲載されている。ここでは山西戦線で捕まえた「可憐な少年兵七名」は「紅槍を持ってゐるだけで勿論戦闘力はゼロ」と嘲るような表現がみられる。これは少年兵に対する評価というよりも、後に続く「共産党の主張する武漢民衆武装も案外この辺が正体かも知れぬ」とあるように、共産党への批判と考えるほうが妥当であろう。中国人少年兵は「敗戦に人員不足をつげる支那軍」により「つい廿日ほど前に」「狩り立て」られた存在、すなわち戦争の被害者として描かれている。

中国人兵士が（少年）であることによって、憎むべき対象から外れる、もしくは外さなければならぬ規範を、同時代の新聞と同様

に先の短歌は表しているのである。さらに、先の新聞記事よりも葛藤が明らかに表れており、その点では実際に戦闘した人間が詠んだものだと言者に感じさせる要素が存在している。

この規範の存在を前提にした上で、更に別の表現を重ねているのが次の短歌である。

「負傷前後」より一首

捕虜にせし一五六歳の少年兵の面輪が時にうかぶことあり

北支／菰淵正雄【戦地】（二〇九頁）

この短歌からは、負傷を起点とした二〇首の短歌群を通して視人物の死に対する認識の変遷を追うことができる。^⑬そのため、この二〇首を順番に確認する。なおこの短歌群については、省略記号として短歌の頭にそれぞれ番号を振る。

「負傷前後」

① 山向うの稜線進む兵士等が敵刺すさまは影繪の如し

北支／菰淵正雄【戦地】（二〇七頁）

② 手榴弾投げつつ逃ぐる敵兵がまたも倒れぬ吾がうつ弾丸に

同（二〇八頁）

③ 陛下萬歳と血に染りたる隊長は雙眼鏡を右手に持ちしままなり

同（二〇八頁）

- ④ やられたと思ひし時ぞ敵彈が吾が肉體を貫き行きしは
同（二〇八頁）
- ⑤ 戦友に抱かれ吾が名呼ばれしに頸髯ばかり見えてゐたりし
同（二〇八頁）
- ⑥ 背に傳ふ血の滴りは感じ居れど吾は言なく仰ぎ臥しをり
同（二〇八頁）
- ⑦ 彈丸きずの身を横へし山なだり夕日移ろふ雲見つつ吾は
同（二〇八頁）
- ⑧ 打倒日本の壁文字まざまざ眼には沁む今日こそ敵を滅ぼさむか
も
同（二〇八頁）
- ⑨ 柿あまたなれる山峡の村に憩ひ敵こもる山を近く見るかも
同（二〇八頁）
- ⑩ 幾日かけて敵を追ひ撃ち山深き山を越ゆれば羊むれ見ゆ
同（二〇八頁）
- ⑪ さまざまの死様したる敵兵の屍は見れど何事もなし
同（二〇八頁）
- ⑫ 夜をこめて驢馬の長鳴き山に響き敵の居るといふ部落ま近し
同（二〇九頁）
- ⑬ 敵兵の残して逃げし南瓜飯湯氣たつままを飯盒につめぬ
同（二〇九頁）
- ⑭ 傷うけし吾に告げきぬ乾パンが飛行機により投下されしとぞ
同（二〇九頁）

- ⑮ 三十餘の擔架のなかに隊長の死骸もありぬ吾もまじりぬ
同（二〇九頁）
- ⑯ 井陘以西に甘藷なしの無電ありてより太原めざしまなくし發ち
ぬ
同（二〇九頁）
- ⑰ 傷きて山に臥しつづ刻経れば既に昏みて時雨降り來ぬ
同（二〇九頁）
- ⑱ 吾を擔架にて運びくれし兵の名を戦死者の中に今日は見たるか
も
同（二〇九頁）
- ⑲ 今日も變りなしと書きつぎありし兵の手記その夜果てにし命か
なしも
同（二〇九頁）
- ⑳ 捕虜にせし一五六歳の少年兵の面輪が時にうかぶことあり
同（二〇九頁）
- ①②では、戦争中の殺人行爲に対して何の躊躇いも持っていないことがうかがえる。①の敵兵を「影繪の如し」と表現する様子からは、どこか緊迫した戦場の実感から離れている。②で自身の手柄を自慢しているような表現と合わせると、殺人行爲に対する罪悪感の欠如が読み取れる。また③で「隊長」が「雙眼鏡」を持っていたことを考えると、詠み手から敵兵への物理的距離もある。
- しかし彼が負傷することによって、状況は一変する(④)。⑤⑥⑦では死を覚悟したためか客観的風景を細かに描写するようになる。そして⑧⑩⑪から分かる通り、これまでより「敵兵」へ明確に憎悪

を抱くことになる。その後無事に後方へと戻ることができるが、⑮

⑮⑯のように、一度感じた死というものを沈思せずにはいられなくなる。その結果、検討短歌⑳では「一五六歳の少年兵」である「捕虜」を思い出すのである。これは自身の負傷状況を「捕虜」という状況に重ね合わせていると考えられる。少年兵が戦争に巻き込まれ「捕虜」になった被害者性と、負傷によって自由を奪われた詠み手の悲劇的な状況を連結したのである。成人している中国人兵士は同じく従軍している立場ではあるが、自身を傷つけた憎しみの対象のため、詠み手の心象風景に浮かぶにふさわしくない。この内心に思い浮かぶ少年兵の姿は、物理的距離を超えて心理的に一体化する存在となっている。

*

以上、本節で検討した中国人少年兵は、現地の子ども達とは異なり、日本人兵士にとっての敵性が問題になっていた。憎むべき敵であることと庇護の対象でもあることの両義性によって、詠み手の感情が揺らいでいる表現が多く見られる。特に激戦区と認められる地域において、中国人少年兵の持つ被害者性やそこから生まれる同一化の視点から、日本人兵士の戦争に対する苦悩が描かれているのは、特筆すべき点である。

ここで確認しておきたいのが、〈少年〉でない捕虜や、一般的な中国人兵士の死の間際には被害者性が必ずしも確認できないということである。

後の世はよき民たれと祈りつつ匪賊の首を切り落したり

人形富士夫【淡水】（二三頁）

これは【淡水】の編集者であった齋藤勇が、淡水学園の学生に対して参考として掲載した短歌である。その描写は戦争犯罪の可能性も含んでいるが、「後の世はよき民たれと祈りつつ」との言葉には詠み手の後ろめたさや反省は微塵も読み取れない。むしろ「匪賊」を救済するかのような言いぶりですらある。そのため「匪賊」が斬首の瞬間に何を思い、何をしていたのかは抜け落ち、自身の感慨のみ語られている。少年兵でなければ捕虜であっても、死の間際であっても被害者とは認められないのである。

ただし中国人少年兵の表象は戦争の悲惨さを明らかにしながらも、その責任の所在を曖昧している面も認められる。彼らは単純な日中の対立構造に落とし込めない境界線上の存在であるがために、日本による侵略行為を批判も正当化もしていない。むしろ戦争に懊悩する日本人兵士の被害者性を引き出しているが、それは戦争という事象においては一面的かつ、微視的であるとも言わざるを得ない。

三、〈青少年〉表象における銃後と戦地の関係性

これまで本稿では、中国人の〈少年〉表象を戦闘員と非戦闘員に大別して検討した。本節ではこれまでの検討内容を利用して、銃後の短歌が持つ表現の特徴を探る。〈少年〉の持つ悲劇性は、どう表

出し、それは短歌上において、どのような効果が認められるのだろうか。日本人〈少年〉との比較をおこないながら、これらを追う。

*

銃後の人間が中国人を短歌に詠みこむためには、メディアを通して情報が必要不可欠であった。それは次の複数の短歌からも分かる。

わが義兄山本猛支那の子を抱きし寫眞は今日届きたり

甲府市／河西二郎【読売】（二七〇頁）

支那の童をわが子のごとく抱き上げてこの老兵は寫りけるかも

橋本重治【銃後】（二八五頁）^⑭

姑娘にあらずと裏に書きありぬわが友と支那の童と遊べるとこ

ろ
東京／島乃保留【アララギ】（二九四頁）

一首目の歌は「わが義兄山本猛」と冒頭に少し過剰な程に写真の人物の情報を詠み込んでおり、明確に家族からの写真だと分かる。

二首目は詠み手と「老兵」の関係性が不明なため判断はできないが、新聞もしくはニュース映画に「寫」ったものだと予想される。三首目も「姑娘にあらず」と「裏に書」いてある状況から、戦地からの写真を詠ったものと推測できる。

詠み手と写真に写っている人物との関係性に相違はあるものの、三首とも主題は「支那の子／童」と親しげなものである。日本人兵士自身が詠んだ短歌とは違い、第三者の目によって、現地の子ども

と日本人兵士とが並置されている。この第三者視点は銃後の短歌の特徴と言えるだろう。^⑮ この並列は猛々しい日本人兵士と、庇護の対象である子どもとの対比構造を生み出し、典型的な日本人兵士の勇猛果敢さとはまた違った一面を強調する効果を持っている。そしてそれは次のように、銃後の日本人〈少年〉表象と通ずる部分が多い。

「夫出征の前後によめる。」より一首

ききわけて領づく吾子を抱きあげてその子の父は去り難ぬかも

川島高子【銃後】（二六九頁）

戦にあすゆく君が腕には愛児とりつきひと日はなれず

白井善司【銃後】（二二九頁）

見送りの幼児見れば残し来し吾子をおもふといふ兵士あり

榎木幸枝【銃後】（二二一頁）

あかあかとふるさとの兵士たち、丘にこどもら小さい手をあげ、旗をふり
伊藤雪雄【銃後】（二六頁）

これら銃後の日本人〈少年〉表象は、パターン化できる。例えば一、二首目は出征近辺の場面に配置することで戦争の物悲しさを引き出すものである。三首目は「見送りの幼児」と「吾子」を重ね合わせる内容であり、これは日本人兵士の内心を明らかにするものとなっている。四首目は同じく出征の場面ではあるものの、兵士と子ども達の交流を描くことで温かな雰囲気伝えるものである。ここ

での「こどもら」は実子ではないが、他の三首と同様の効果を持っていると言えよう。

これらのパターンにおいても、日本人兵士が子どもの前では優しい一面や寂寥感を表している。これは、中国人である現地の子ども達を描く中で表していたものと同形である。特に四首目の表現は本稿で取り上げた「日章旗」歌と重なる部分が大きい。

このような先の一、二、三首目の短歌にある、実子を想う感情が戦地で表出したものが次の短歌である。

「十三年五月上旬、〇州進撃」より一首

路傍に水すすむる小孩は吾子より二つ位は上か

中支／鈴木清太郎【戦地】（二四九頁）

ここでは「小孩」のことを「吾子より二つ位は上か」と並列させたことにより、詠み手の同情心を読者が推察することが可能になっている。先に検討した歌のように、大陸に赴いた兵士の中には子どもがいる者も多かった。その中で父親の立場から現地の子どもを「吾子」と同一視する感情は想像に難くない。

実際に『東京朝日新聞』（一九三七年一〇月一九日、夕刊、二面）には「支那少年に注ぐお父さん」兵の慈愛 涙の一篇 豆伍長物語」といった、まさに国境を超えた子どもへの愛情を語るような話が掲載されていた。そこには父を「支那の兵隊に殺された」「陳少

年」一六歳が「池本登上等兵」によって「部隊に連れ帰」られ、傷の手当をされたこと、それによってなついていたとある。しかし池本上等兵は一〇月一日の戦場で重傷を負い、陳少年の看病もむなしく、息を引き取る。その際に「妻と三人の子供」に対して「立派に軍人としての任務を果たして戦死した」ことの言伝とともに、「豆上等兵」すなわち陳少年の世話も頼む。そして最後に「天皇陛下万歳」と高唱するのである。

この話は、当時のあるべき日本人兵士の象徴を喧伝するためのプロパガンダ言説と考えるとよいだろう。これは『読売新聞』（一九三七年一〇月一九日、夕刊、二面）にも「わが勇士の死を嘆く支那少年兵 戦線に生まれた佳話」として掲載されており、当時広く日本に共有されたものだと考えられる。

この共有されていた日中の子ども同一化の視線は、銃後でも同様のことが母親の立場からおこなわれている。¹⁶

國のため命ささげて征きし子ぞ病みて死すなとただ祈るのみ

三好ゆきゑ【銃後】（二三三頁）

「帰還せし子。」

再びは見じと征たせし吾子のかほいま目のあたり笑みてゐるは
や 同（二三三頁）

軍服の我が子の姿見上げつつ今更何もいふことはなし

同（二三三頁）

《支那事変歌集》のうち【銃後】は編纂方針によって一人当たりの歌数かなり制限されているが、この短歌群は三つの短歌が連なることによって物語が展開しているため、その方針からの例外となっている。三首とも、子を戦地に送った親の視点から親心を詠っている。一首目では自身の子に対して「病みて死すなとただ祈るのみ」とあるが、これは「國のため命ささげ」るために無駄死にしないことを望んでいるものである。二首目ではその子が帰還しその顔を見ることで喜ばしく思い、三首目では「軍服の我が子の姿」を見て「何もいふことはな」と、感慨は頂点に達している。この視線は中国人少年兵にも向けられる。

塹に伏す支那少年の亡骸よ母が激励の手紙持つもあり

岐阜／鈴木朝子【アララギ】(二九八頁)

この短歌で核となるのはその手紙の描写、「母が激励の手紙持つもあり」であろう。詠み手の属性は分からないため安易には断定できないが「鈴木朝子」という女性が、母としての親心に強い関心を抱いていることが分かる。そのため書きぶりからこの戦場には無数の「亡骸」があると思われるが、その中から手紙を持つ者は、焦点化される存在として描かれているのである。

そして詠み手がこのような短歌を詠むことができたのは、親心という戦地に赴かなくとも分かる表現を通じて戦場をまなざしたから

である。この親心は先に挙げた三好ゆきゑの歌と地平を同じにするものである。子を想う気持ちを通して表現された《少年》像は、その所属する国家や土地、身分を無化して、憐れみや慈しみの対象として表現が酷似するに至っている。

*

以上のように、戦地詠と銃後の短歌における《少年》表象は、日本人の憐憫を誘う対象として同傾向と言える。それではなぜ《少年》表象に共通項が生まれたのだろうか。ここで、銃後の表現に先行性があつた可能性を指摘したい。

日中戦争下において早期に犠牲者としての《少年》を表象したのは、与謝野晶子である。安藤寛が上海事変を報じた「敵死体の悉くは紅顔の美少年 憎むべき敵将蔡廷楷」(『読売新聞』一九三三年三月四日付夕刊、二面)を受けて、与謝野晶子は「紅顔の死」^⑮を作詩、翌日五日には「紅顔の死」は『読売新聞』朝刊誌上に掲載されている。小松靖彦が検討しているように、実際に上海事変で多くの少年が犠牲になり、そのことが文学テキストに影響を与えている(『戦争下の文学者たち——『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』花鳥社、二〇二一年一月、五三頁)。

ここで注目するべきは、安藤寛の記事と与謝野晶子の詩との関連性である。与謝野晶子は「紅顔の死」の詞書として「讀賣新聞記者安藤氏の上海通信を讀み、感動して作る。」と書いており、その影響関係は疑うべくもない。しかし「紅顔の死」には安藤寛の記事を

反映させていない部分がある。安藤寛は見出しに「紅顔の美少年」という言葉を扇動的に用いているが、与謝野晶子は「美少年」の要素を捨象し、見た目の麗しさに言及していない。一方で幼さを表す「紅顔」の文字はそのまま題に流用し、〈少年〉であることは引き継いだ。むしろ年齢を操作して、より幼さを強調していることが認められる。安藤寛の記事においては「どの死体もことごとく十八九、二十歳前後の紅顔の美少年」と記載されており、他にも「竹藪の中で目を開いたまゝ、倒れてゐる敵の将校らしき服装の死体」を「年の頃廿三か四か」と推察する場面がある。しかし「紅顔の死」では「十七八の若さなり、／二十歳を出たる顔もなし。」と設定される。

与謝野晶子にとって「年の頃廿三か四か」の成人している「将校」の存在も、彼らが「美少年」であることも必要なかった。詩の冒頭では「折り重なる死屍」と視たものを途中で「彼等、やさしき母あらん、」と母の立場からまなざすことで感情移入し、最終連では「泥と血を浴び斃れたる／紅顔の子の五百人。」と同情の対象へと変化する様を描き出すことに、与謝野晶子は目的を置いていたのである。安藤寛も与謝野晶子も軍の指揮官であった蔡廷鍇を諸悪の根源として描き、多くの中国人少年兵を、被害者として描いた点では同じ方向性を持っていた。しかし年齢を操作し死者の人数も明記した「紅顔の死」の方が、より作爲的に〈少年〉の持つ悲劇的な性格を顕在化させている。²⁰

そしてこのコードを直接、間接を問わずに、〈支那事変歌集〉に

短歌が掲載されている歌人の多くが、受容できる状況であったことが確認できる。例えば少年兵の死体が多く存在している様は「転る少年兵の屍 涙そゝく川並部隊長」（『東京朝日新聞』、一九三七年九月二一日、朝刊、一一面）で確認でき、「紅顔」の少年に注目すれば、「あッ少年兵の屍 まだ生温き紅顔に土かぶせ 敵ながら壮烈の最期に冥福」（『読売新聞』、一九三七年九月六日、朝刊、七面）や、「無名紅顔の敵兵に花を飾る皇軍勇士 敵ながら天晴れ 青年教導隊」（『読売新聞』、一九三八年六月一七日、夕刊、一面）などが目に入ってくる。²¹これらの相関関係の中に、今まで検討してきた短歌は配置できるはずだ。

これらを踏まえると、戦地と銃後は互いに反響しながら、それぞれの定形表現を共有していたと考えるべきであろう。これまでの一元的な〈戦地／銃後の断絶〉だけでなく、戦地と銃後が連結していたことにも注目するべきである。

結

以上、与謝野晶子の詩にまで遡ったが、このように戦場と銃後の短歌で〈少年〉表象に共通項が生まれるのは、戦地詠が銃後の人間に向けられていたことも遠因として考えられる。戦地詠は最終的には銃後である日本で発表され、そして評価される。それは例えば文学者としての地位を求め、雑誌の掲載の有無を気にした兵士の詠み手達が、銃後の価値観の影響下にあることを意味する。

例えば現役兵士歌人である渡邊直己は一九三八年四月六日の日記に「アララギを開いては見てゐる。上稲吉、自分は依然戦の歌で頑張り通した。そして俺は未だ其の四にくつついている」(引用は『渡邊直己全集』同上、三二〇頁)と、自身の戦地詠が銃後でどう評価されるのか気にしている様子が、克明に描かれている。渡邊直己はその戦地詠が評価され、文学者として名を挙げた成功者と言えるが、このような思いや状況は他の戦地詠創作者も同じだったと考えられる。そしてそのような状況を作り出したのは、銃後の歌人たちである。斎藤茂吉が「制服ユラオーム的てきうた歌」という独自の語を用いて、銃後短歌の閉塞感を訴えたが、戦地詠を発表する兵士歌人達は、その状況を打破する役目を自ずと期待されることになった。戦地にいる歌人達は銃後にはない題材を探し、詠もうとする。しかしそれは銃後に認められ、評価されるためであり、その出発点からして一種の従属関係にある。戦地にいるからこそその緊迫感や題材の取り方は確認できるが、それらをどう表現するかは銃後に依っている面が否めない。むしろ戦地詠でありながらリアリティを欠いている短歌も存在する。

敵兵の屍體おほむね少年なり龍膽の花さける山野に

北支／永井隆^②【アララギ】(二五九頁)

ここでは「おほむね少年」である「敵兵の屍體」をロマンチシズ

〈支那事変歌集〉における中国人表象

ムに満ちた場面に配置するしかしそれは、死体の持つ戦地の悲惨さや非常時性を過度に脱色することに繋がり、リアリティに欠けると言わざるを得ない。従来、リアリティがあるとされていた戦地詠でありながら、戦場で目にしたものを素材として抽出し、非現実な美的空間を構成する方法は、銃後に存在していた少年兵は憐れむべき^③といったコードの影響が濃い。

高崎隆治が『戦争詩歌集事典』(日本図書センター、一九八七年九月)で「戦後の永い年月、戦時下の戦争文学が学問的にも社会的にも無価値として抹殺され、無視されつづけてきた」(三七九頁)と指摘するように、戦争文学の研究が積極的に進められなかった時期があった。近年ではその状況は改善されつつあるが、いまだ多くの余白が残されている。〈支那事変歌集〉を構成する戦地と銃後といった二項対立の概念を詳細に検討し、再分類することに短歌研究の展望があるのではないだろうか。

註

- ① 先行研究として中西洋子の「『支那事変歌集 塹壕の砂文字』と柳原白蓮——その編纂意図」(『日本文化研究』第三号、二〇一八年三月)があるが、「支那事変歌集」の表記は、外箱にのみある。奥付には「支那事変歌集」表記がないため、本稿ではこちらに従う。
- ② (一)(三)はそれぞれ特殊な成立背景があり、それらも検討すべき課題だが、本稿は〈支那事変歌集〉全体の位置づけを再考することを目的としているため、深く立ち入らない。以下、(一)(三)それぞれの概略を記す。

柳原白蓮選『塹壕の砂文字』(同上)は「朝日新聞、日日新聞、讀賣新聞、都新聞」「福岡日々新聞、九州日報、等」「朝鮮行政、及び、報國」から選歌している(二〇七頁)。この編集方針は他の〈支那事変歌集〉と近似しており、収録されている短歌が他の〈支那事変歌集〉と重複するものが多いため、本稿の検討対象には含まない。

斎藤勇編『続支那事変歌集』(同上)は台湾の私立学校、淡水学園で発行された短歌集のことである。現存が確認できていないが正編『支那事変歌集』を一九三八年に発行しており、これが〈支那事変歌集〉中で最初期のものである可能性が高い。

③ この企画は俳句も同時に募集している。選者は高濱虚子が務めている。俳句についても【読売】とほとんど同じ形式で『支那事変句集』(高濱虚子選、三省堂、一九三九年四月)として出版されている。しかし『支那事変句集』は、『読売新聞』紙上での広告は一九三九年一〇月三十一日の朝刊に一度のみであり、本誌に寄せている高濱虚子の「序」もかなり簡素なものである。

④ 「凡例」には「概算して三万首以上」から「二千七百四首」を選んだ(二頁)と、具体的な数字が示されている。

⑤ 斎藤茂吉が寄せた序文の年数表記は、「紀元二千六百年七月中瀬」と記されている。

⑥ 当該論文は「小川」姓で発表されているが、本稿では別の書誌も紹介する都合上「小松」姓に統一する。

⑦ 「聖戦歌集」として検討対象になっているのは次のものである。

① 展望社編輯部編『聖戦短歌集書物』(成史書院、一九三八年一〇月)

② 斎藤茂吉・佐佐木信綱選『支那事変歌集』(三省堂、一九三八年一二月)

③ 大日本歌人協会編『支那事変歌集 戦地篇』(改造社、一九三八年一二月)

④ 佐佐木信綱・伊藤嘉夫編『傷痍軍人聖戦歌集 第一輯』(人文書院、一九三九年一月)

⑤ 胡桃社同人編『聖戦萬葉集』(都祥閣、一九三九年四月)

⑥ 斎藤茂吉・佐佐木信綱・北原白秋選『聖戦歌集』(岡倉書房、一九三九年一〇月)

⑦ 佐佐木信綱・伊藤嘉夫編『傷痍軍人聖戦歌集 第二輯』(人文書院、一九三九年一月)

⑧ 斎藤茂吉・土屋文明編『支那事変歌集』(岩波書店、一九四〇年一〇月)

⑨ 大日本歌人協会編『支那事変歌集 銃後篇』(大日本歌人協会、一九四一年一〇月)

⑩ 佐佐木信綱・北原白秋選『第二聖戦歌集』(岡倉書房、一九四一年一月)

⑧ 「凡例」には「整理するに当り、なほ危惧したことは、戦地詠ならざる戦地詠の加はること」と記されている。そのため校正中に二名の作者を除いている(三頁)。「後日発見した場合無論除かねばならない」(三頁)との言葉にも、戦地と銃後を明確に二分する意識が垣間見える。

⑨ 次の歌は銃後である日本で詠まれた、日本人による歌である。
支那事変心にもちてゆく街に英米佛支等の人の目と逢ふ

尾坂常子【銃後】(二八四頁)

この短歌が描いている様は、本文で挙げている短歌の対偶関係にあると言える。

⑩ アーロン・W・ムーアによって、蒋介石／国民党が若者を戦略的に動員していたことが明らかにされている(李仁哲訳「錯綜する願い——国民政府教育部に寄せられた学生の手紙から」、波多野澄雄・久保亨・中村元哉編『日中戦争の国際共同研究6 日中終戦と戦後アジアへの展望』慶応義塾大学出版会、二〇一七年一月、一八三頁)。

⑪ 次の短歌は中国人兵士の臆病な姿や卑怯さ、底意地の悪さのよう
なものが強調されている。

患者自動車の行手にかがまり居たる敵兵が一齊射撃の命を下せ
り 北支／大久保福太郎【戦地】(六二頁)

工事すて逃げし支那軍のトーチカが崑山を過ぎし畑中にあり
中支／浅見幸三【アララギ】(三頁)

支那兵の散兵壕は前よりも後にあがる足掛けつくれり
中支／堀川静夫【アララギ】(一九四頁)

避難する民を自動車に轢き殺し敵の師長は退却しゆけり
同(一九五頁)

⑫ 撃つ対象としてしか見ていない場合や、遠景の中国人表象が目立
つ。

右寄りに敗走せむとする敵兵を撃ちぎまに砲の射向變へゆく
中支／大内田葛枝【アララギ】(五八頁)

空青き山の稜線をかけくだる影のふたつは敵兵らしき
北支／川野弘之【戦地】(六九頁)

焦點を合はすレンズにうつり来てみだる敵の影あわたし
同(六九頁)

⑬ なお、この歌は【アララギ】(九八頁)にも収められている。こ
こでは二〇首の内、一部が同時掲載されている。

⑭ 【銃後】には、詠み手の出身地情報が記載されていない。
戦地においても「焚火する我がつはもののかたはらに薪割る小さ
き支那の子あり」(赤十字看護婦／島川みどり【戦地】一三三頁)

のように、第三者による日本人兵士と現地の子どもの並置はおこな
われている。しかしこれは歌の詠み手が「赤十字看護婦」であるた
めだと考えられる。『支那事変救護員美談 第二輯』(日本赤十字社、
一九三八年八月)中には、元看護士である上原ひでによる日露戦争
の回顧「一、事變下の海軍記念日を迎へ日本海々戦追想談」のよう
に日本人兵士の活躍を目の当たりにした報告がある。非戦闘員であ

りながら戦場を見ることのできる特殊な立場であり、その心持ちは
どちらかと言えば銃後の人間に近いものがある。

⑮ 中島美幸「日本女性詩史序説 文学・戦争・ジェンダー」(学術論
文、二〇〇三年九月、一一四頁)では「女性役割」という言葉を用
いて、女性が「国民」として戦争に協力していくことを期待する言
説の存在を論じている。母の視点から詠む短歌の存在は戦地と銃後
におけるジェンダー規範の存在が関係していると考えられるが、本
稿では深く立ち入らない。

⑯ 【銃後】の「凡例」にて『銃後篇』は編纂会議に於いて最高十首
と予め議定されてゐた(五頁)とあるが、多くが一首のみの掲載
となっている。なお三好ゆきゑは全八首が収められている。

⑰ 紅顔の死 與謝野晶子
讀賣新聞記者安藤氏の上海通信を讀み、感動して作る。

江灣鎮の西の方、
かの塹壕に何を見る。
行けども行けども敵の死屍、
折れ重なる敵の死屍。

中に一きは哀しきは、
學生隊の五百人。
十七八の若さなり、
二十歳を出たる顔もなし。

彼等、やさしき母あらん、
その母如何に是を見ん。
支那の習ひに、美しき、
許嫁さへあるならん。

彼等すこしく書を讀めり、
世界のことも知りたらん、
國の和平を希ひたる、
孫中山の名も知らん。

誰れぞ、彼等を欺きて、
そのうら若き純情に
善き隣なる日本を
侮るべしと教えしは。

誰れぞ、彼等を唆かし、
筆を劍に代へしめて、
若き命を、此春の
梅に先だち散らせるは。

十九路軍の總司令、
蔡廷楷の愚かさよ、
今日の中にも亡ぶべき
己れの軍を知らざりき。

江灣鎮の西の方
かの塹壕に何を見る。
泥と血を浴び斃れたる
紅顔の子の五百人。

①⑨ 『読売新聞』一九三二年三月五日付朝刊、七面
詩というテキストの性格を考慮し、以下、句読点も含めて引用す
る。

②⑩ 「紅顔の死」では「學生隊の五百人。」と人数が記されているが、
安藤寛の記事文中には死体の人数が明記されていない。

②⑪ それぞれの簡単な内容は以下の通り。

① 「転る少年兵の屍 涙そ、ぐ川並部隊長」（同上）

激戦区であつたことで知られる呉淞で「戦線に横たはる」「十
四五歳になるかならぬ少年兵が六つ」「遺棄死体」としてあり、
それを見て川並部隊長は「なんともいへない気ち」を吐露する。
その後、「こんな小さい者にまで機関銃を操らせたり手榴弾も投
げさせるんだからナァ」と、「敵の陣営がいかに苦しいのか」を
語るための材料として回収されている。

② 「あつ少年兵の屍 まだ生温き紅顔に土かぶせ 敵ながら壮烈の
最期に冥福」（同上）

「まだ年齢僅な紅顔可憐な支那兵一名が、モーゼル銃をしつか
と抱いて戦死してゐた」。この死体は「まだ生温か」く、また周
囲の様子を見ると懸命に戦った様子もうかがえる。そのため「こ
の年若い無名戦士の拙い武運にぞる哀れを感じて方の辺りに柔
かい土をかけてやり冥福を祈つてそこを立ち去つた」とある。

③ 「無名紅顔の敵兵に花を飾る皇軍勇士 敵ながら天晴れ 青年教
導隊」（同上）

「十五歳から廿三歳までの青年」が日本軍の足止めのために奮
戦した様子が報じられている。「炎熱百四十度の中原で」「肉弾」
「決戦」した中国人少年兵を「抵抗の勇敢さは今次事変では珍し
いもの」と称賛している。さらに手榴弾や日本兵の銃剣を用いて
自害する姿については「一ノ谷の熊谷、敦盛の例にも似てゐる」
と評価している。

②② 「童馬山房夜話」（『アララギ』一九四二年五月、二三頁）

「戦争が始まると、歌人は勇奮感激して歌を作り、また放送局
でも雑誌でも新聞でも競うて戦争の歌を徴求し、ここに於て歌も武
装せざるを得なかつた」が「その武装は一樣の武装で、千差万別各
人各別といふわけには行かなかつた。なぜかといふに、事実が一つ
で、それを報道する新聞などの文章もまた一つだからである」。「そ

の一つの材料に数千の歌人数万の歌人が寄つてたかつて作歌するのであるから、いきほひ、一つの材料だけの歌に終始し、単調にならざることを得ぬ運命になつた。私はさういふ歌に、『制服ユニフォーム的歌』といふ名を附けて、みづからを慰めた」

②『長崎の鐘』（日比谷出版社、一九四九年一月）で知られる永井隆だと推測される。『永井隆全集』の「解説」（講談社、一九七一年八月、九八九頁）には「長崎医大には、アララギ支社があつて短歌研究が盛んに行われて」おり「永井さんは松江高校時代から短歌会を牛耳っていたほど、短歌に興味を持っていたので、大学でもアララギ支社にはいり、歌会にも出席していた」とアララギとの繋がりが確認できる。また出征先も「北支山岳戦、杭州湾、バイアス湾等敵前上陸作戦、中支、南支、ノモンハン戦争」（『年譜』一〇〇九頁）とあり、短歌に書かれている「北支」表記とも合致する。

追記

引用文中の旧字は新字に改めたが、テキストの特質を考慮し、短歌・詩を引用する際には旧字および異体字は現環境で再現できるものはそのままとした。